京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

平成29年9月18日

会長　辻　井　昭　雄　様

所属部局・研究科　文学研究科

職　名・学　年　博士後期課程3年

氏　　名　岡　田　勇　督

助成の種類	**平成 28 年度　・　在外研究助成**	
研究課題名	ガダマー解釈学の宗教思想に対する寄与	
受入機関	ドイツ・ハイデルベルク大学	
渡航期間	平成28年　9月19日　～　平成29年　9月　1日	
成果の概要	**タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料　□ 無　□ 有(　　)**	
会計報告	交付を受けた助成金額	270　万円
	使用した助成金額	270　万円
	返納すべき助成金額	0　円
	助成金の使途内訳	渡航費・滞在費　270万円
当財団の助成について	多くの成果を得、研究者として次のステップにつなげることを助けてくれた奨学金でした。感謝いたします。	

京都大学教育研究振興財団助成 平成 28 年度 在外研究長期助成 成果の概要

文学研究科 博士課程三年 岡田勇督

報告者はドイツ・ハイデルベルク大学において、「ガダマー解釈学の宗教思想に対する寄与」に関する研究を行った。哲学者ハンス=ゲオルク・ガダマー(1900-2002)は戦後長らくハイデルベルクの哲学科において教鞭をとり、その主著『真理と方法』(1960)において展開されたいわゆる〈哲学的解釈学〉は分野間の垣根を超えて 20 世紀後半の人文学全体に影響を及ぼした。本研究は、ガダマーにおけるこの哲学的解釈学を理論の深みにおいて捉えつつ、それが聖書解釈などの宗教的な文脈においてどのように機能し得るのかを考察することを目標としている。

まず、国際学会の北米哲学的解釈学協会において、「理解されうる存在は言語である」というガダマーの言葉の解釈を示す発表を行った(“Being that can be understood is language: Tracing its Wirkungsgeschichte,” 11th Annual Meeting of North American Society for Philosophical Hermeneutics (NAPSH), Texas: Texas A & M University, September, 2016)。この言葉は長らく議論が交わされてきた研究史上の要点であり、ガダマーの思想全体の理解を左右する重要性を持つ。本発表は同研究の第一人者であるジャン・グロンダン氏などを含め多くの研究者から好意的に迎えられた。

また、ガダマーを宗教という領域につなぐための接続点として、〈人間学〉という概念の可能性を示す議論を、神学の学会であるアメリカの福音主義神学協会において行った(“H.G. Gadamer’s Reading of Trinity: Towards a Hermeneutic Anthropology.”, “Trinity” National Annual Meeting of Evangelical Philosophical Society, November, 2016)。学会の全体テーマである〈三位一体〉に哲学者ガダマーの議論を接続するという観点は、ガダマー研究の側においては関心がもたれつつも、神学の分野にとっては新たな視角であり、その貢献が評価された。なおこの学会に関しては、学問だけではなく政治的にも世界に影響をもつアメリカ福音派の学会であることに鑑みて、以下のような学会報告を行っている(「学会報告 : 福音主義神学協会(Evangelical Theological Society)」『キリスト教学研究室紀要』第 5 号、2017 年、107-116 頁)。

現在はこれらの発表の論文化が進められている段階であるが、それとは別の成果も得ることができた。ガダマーと神学者ヴォルフハルト・パネンベルクの議論に関する論考である「ガダマーとパネンベルク」は査読雑誌『日本の神学』への掲載が決定された。また、ガダマーを宗教へと接続するさいのもう一つの重要な概念として挙げられる〈有限性〉の概念に関しても、成果を発表することができた(「H.G. ガダマーの解釈学における〈有限性〉の概念」『キリスト教学研究室紀要』第 5 号、2017 年、77-90 頁)。

本研究滞在の大きな目標として、解釈学を専門とする研究者間での交流の促進が目標の段階で掲げられていたが、それもさまざまな形で実現されることになった。フライブルクで開催された国際解釈学シンポジウムに参加し、アメリカ、ドイツ、フランスなどの研究者との交流が可能となった(Internationales Hermeneutik-Symposium 2017. Thema: Logos)。また、哲学的解釈学の伝統を探るうえで最重要国の一つであるイタリアを訪問し、文献調査をすることもできた。

ドイツに滞在して得た知見は、専門のガダマー研究に留まらない。近年研究が盛り上がりを見せ、解釈学的な伝統におけるガダマーの先駆者でもある神学者シュライアマハーの国際学会

がハレで開かれたさいに参加し、この報告を行っている(「学会報告：国際シュライアマハー学会(Internationaler Schleiermacher-Kongress)」『キリスト教学研究室紀要』第 5 号、2017 年、117-126 頁)。日本でのシュライアマハー研究は停滞を見せていることがしばしば指摘されるが、本報告はドイツにおけるシュライアマハー研究の最先端の成果を一部紹介することができた。

最後に、今回の研究滞在を通して、以前から念頭にあった日本・アジアという自らのバックグラウンドに対する問いが先鋭化された。ドイツにおいてドイツ思想を研究する主体としての自分に対する関心が膨らみ、京都大学と提携を結んでいるハイデルベルク大学のトランス・カルチュラル・スタディーズや日本学部とのかかわりがそれを後押しすることになった。京大とハイデルベルク大の開催するジョイントレクチャーでは、東南アジア地域研究研究所の貴志俊彦教授が招かれたさい、日本語とドイツ語の通訳を行い、日本戦後史に関する興味深い議論に加わることができた(通訳(日本語⇔ドイツ語)：貴志俊彦「日本における『戦後』概念の変遷と終焉」、第四回日独ジョイントレクチャー、於：ドイツ・ハイデルベルク大学、2017 年 7 月 7 日)。また、京都と姉妹都市であるケルンで行われた日本文化紹介のイベントでは、京都学派とドイツのつながりに関する短い講演を行い、京都学派の思想的遺産を紹介する機会を得た(「京都学派とドイツ」ケルン京都ターク、於：ケルン・日本文化インスティチュート、2017 年 1 月 28 日)。

このように多様な成果も、京都大学研究教育振興財団の助成なしでは実現しえなかった。この場を借りて篤く御礼を申し上げたい。